

「つり環境ビジョン」第2弾

神奈川県栽培漁業協会を視察

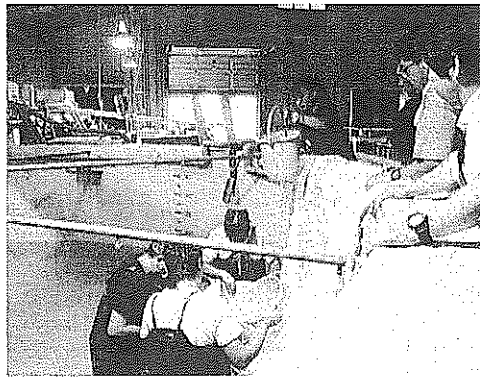
調査検証型放流事業に着手

(一社) 日本釣用品工業会と(公財) 日本釣振興会が共同で取り組む「釣り環境ビジョン」における優先三事業の一つ、「調査検証型マダイ放流」の準備が進められている。城ヶ島にある(公財) 神奈川県栽培漁業協会(神奈川県三浦市)との契約を経て、六月六日(木)には同ビジョン委員長の小島忠雄氏ら日釣工関係者が現地を訪れ、マダイ中間育成の状況や作業の様子などを視察した。(2面に関連記事)

魚族資源を豊かにするための放流事業は、その効果を科学的に調査および検証するなどの見地から、今年度は神奈川県栽培漁業協会と契約を締結し、この事業を推進することにした。

同協会はマダイやクロダイ、ヒラメなど魚類の他、アワビやササエ等、貝類の種苗生産も行っている。

日釣工では去る四月二十一日、静岡県御前崎市浜岡からマダイの受精卵



①プールから稚魚を集め、②中間育成後へ移送作業を実施

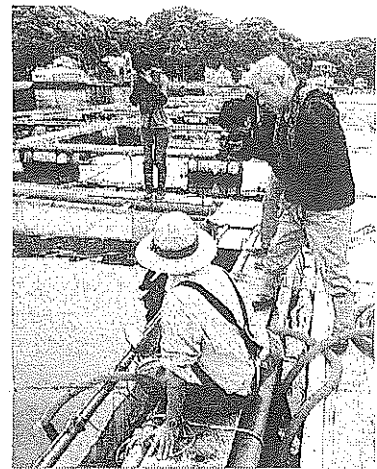


三百万粒を入手。孵化し、陸上飼育施設の円形プール(直径6.6m)にて、えながら約四十日間飼育

され、全長約20mmまで順調に生育。このサイズに成長すると配合エサに切り替え、次は「中間育成施設」と呼ばれる海上の筏(生簀)へと移動させ

られ、全長約20mmまで順調に生育。このサイズに成長すると配合エサに切り替え、次は「中間育成施設」と呼ばれる海上の筏(生簀)へと移動させられるが、この作業が当日行われた。

夜明けと同時に円形プール内を清掃したあと、ゆつくりと水槽の水位を落としてから、目の細かい網を使いマダイの稚魚を集める。そして、トラックに用意されたタンクの中へバケツを使い水ごと



小島忠雄委員長が視察

と移動。わずか20mm程度の稚魚はともデリケートで、魚体が網に触れないようにゆつくりと、そして手早く作業が進められた。

中間育成筏は、三浦半島の南西に位置する穏やかな小網代湾に設置されている。トラックで至近のマリーナまで移動したら、稚魚を収めたタンクは速やかに運搬筏へ積み込み、中間育成筏まで運ばれた。

「サイホン方式」と呼ばれる特殊な方法で、マダイの稚魚をタンクから筏へと移動。また小さく抵抗力の弱い稚魚は、人の手はもちろん、網などに触れるだけでも死んでしまうことが多く、すべてを移動させる「水ごと魚を移動させる」ように気を配る。また移動後

も、給餌はもちろん、鳥に襲われないよう防鳥ネットをかぶせたり、目の細かい網の目詰まりを防ぐために筏の網を交換したりと、日常的に面倒を見る必要がある。

これらを経て約二カ月後の八月頃には、体力が外敵等からも襲われにくくなる60mm前後まで成長。順調に成長すれば、今年八月頃には神奈川県沿岸全域への放流作業が行われる予定だ。

当日行われた、マダイ稚魚の中間育成施設への移動作業は、同協会の今井利為専務理事の取り計らいにより、見学が許可された。

同協会関係者に日釣工からも、つり環境ビジョン委員長の小島忠雄氏や事務局が同行。また、釣り関係メディアも参加。小島委員長らは海上の中間育成施設への移送作業を見守った。

また、この日は夏に向けての育成作業、そして放流作業のほかに、放流後の漁獲および釣獲率のリサーチに至るまでの流れなどについて、今井専務理事から詳しく説明を受けた。